学校だより

シンシナティ日本語補習校
平成24年度NO.8号
平成24年11月16日(金)

平成２４年１０月２０日（土）オープンハウスが行われ、子どもたちがお世話になっている現地校の先生方に実際、日本語での授業に参加して頂きました。
どのように日本語教育を感じられたのでしょうか？子どもたちの声を通し紹介します。

目的　①本校の目的並びに日本の教育について理解を深めていただく機会とする。
②異文化に学ぶ子どもの教育のため、日米双方の教育について互いに理解を深める場とする。
③子どもの情報を現地校の先生へ提供する。

子どもたちの様子について

幼稚部・写真を撮っていただいたり、話しかけていただいたり嬉しそうだった。
・先生が教室に入ってこられると多少そわそわした感が見られたが、全般的に落ち着いていた。
・現地校の先生に話しかけられ、それに英語で対応する子どもたちの様子を垣間見て、現地校でどのように過ごしているか（コミュニケーションがどの程度図られていそうか）察しがついた。
・子どもの平日の姿を知る一端となってよかった。朝から興奮していたにもかかわらず、自由時間（交流時間）には恥ずかしがって会話をしない子どももいた。

小学部・対面時は恥ずかしそうにしていましたが、授業に集中し始めると、いつもと変わらず真面目に取り組む姿勢には、先生方も感心していました。
・ゲストのうち一人の先生は生徒の隣に座り、授業の様子を聞いていた。他のクラスにも受け持ちの生徒がおり、見学されていた。
・自分の先生が来られたら、とても嬉しそうにしていた。積極的に挙手する子どもも普段の授業より多くいた。
・自分の先生が来ているかどうかが気になり、後ろを見たりしていた。先生が来られた時には笑顔がでていた。現地校の先生方も、とても親しみやすい雰囲気で入ってこられた。

中学部・あまり普段と変わらないと思っていたが、一部の生徒は緊張していたらしい。（本人談）
・恥ずかしそうに、でも嬉しそうに話をしていた。
・生徒たちはとても嬉しそうだった。先生方も授業後に生徒に話しかけていた。
・生徒、ゲスト数共に少なく、挨拶を交わす程度だった。

箱崎智洋総務副理事長を初め、理事会、PTA 役員、ボランティアの方々の協力により、オープンハウスを恙無く終了することができました。全体会では多くの質問がだされ、日本の教育に感心が寄せられ充実した会になりました。これを機会に更に、現地校と本校が連携・協力し子どもの教育を充実させていきたいと思っています。また双方の伝統、文化等、貴重な体験を通し子どもたちが自らの向上を図っていくことを期待します。現地校の先生方お忙しい中、お休みにも拘わらず本校まで足を伸ばして頂きありがとうございました。オープンハウスに携わった皆様に心より感謝申しあげます。ご苦労様でした。

中・高等学部、講演会

演　題：東日本大地震から考えるエネルギーと私たちの暮らし
講演日：平成２４年１１月３日（土）
講　師：浅野　智恵美　先生
（環境カウンセラー、消費生活アドバイザー）

「東日本大地震から考えるエネルギーと私たちの暮らし」あの大地震から１年が流れ悲惨な出来事の影が薄れようとしている時に、浅野智恵美先生より「今、被災地では・・・」と言う演題のもと、現実的なお話を頂きました。生徒たちは改めて、大地震を思い浮かべ真剣な眼差しで先生のお話に耳を傾けていました。そのお話の要旨をお伝えします。

福島県の避難校の現状
・東京電力福島第一原発事故の影響で、福島県内では未だに４６の小、中学校、高校が地元に帰れず、臨時休校し、よそのまちで間借りしている。
・富岡町立第一小学校は、４００人いた児童数が、１８人まで減った。（２０１２年１０月５日）
・本宮市に避難している浪江町の県立浪江高校は、今春の入学者がわずか７人。
・避難校の多くは、生徒や教室不足から、学校行事や一部授業が行えない。
・先行きが見えず、通う子がさらに減る悪循環。
・地元復興を担う将来の人材確保面からも、大きな悩みを抱えている。
原発事故で分断された人々
・南相馬市は、原発２０Km 圏内の警戒区域、原発３０Km 圏内の緊急時避難準備区域、計画的避難区域など、市域が５種類に区分けされた。
・分断で、住民感情に隔たりが生まれた。
・良好だった人のつながりが、環境ストレスで一部崩壊。
・原発３０Km 圏内の緊急時避難準備区域が９月３０日に解除された後も、多くの市民は戻ってきていない。
・カーテンを閉ざした民家や、シャッターを降ろした店舗が連なっていた。
・福島県は、地震、津波、原発事故、風評被害の４重苦の中にある。
・生態系が寸断されるなど、様々な面でバランスが崩れていた。
地震から１年半後（２０１２年９月：宮城県石巻市）
・石巻市は東日本大震災の被災人口が最大。４０００人近い死者・行方不明者を出した。
・砂浜につながる階段は、津波の被害で今も崩れたまま。
・海岸の反対側は、更地が続いていた。
・石巻市は三陸沖で黒潮と親潮がぶつかるため、かつては世界三大魚場の一つとして全国有数の水産都市として栄えた。
・宮城県第二の人口を擁し、ピークの１９８５年は１８６，５９７人。
・１４９，０９３人に激減（推計人口：２０１２年８月１日）。
原子力発電をとり巻く現状と課題
・置き場のない放射性廃棄物はふえるばかり。
・高レベル放射性廃棄物の処分方法、処分地はいまだ未決定。
原発ゼロ政策の課題
・原発再稼働を最小限に抑え、早期の原発ゼロをどう達成するか？
・脱原発にかかる経済的、政治的なコストをどうするか？
・核燃料サイクル政策の見直しも必要。
・原発ゼロ新戦略は、閣議決定されなかった。
まとめ：国家レベル、政治的な難しい問題ではあるが、我々一人ひとり何ができるか、どうすれば良いか等、意識の高揚を培う講演会であった。　（文責：長曾我部　敬一）

浅野　智恵美先生